福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

学校支援活動事業におけるケースカンファレンスの在り方に関する質的分析：ケースカンファレンスの利点と課題の分析に基づく話し手と聞き手の相互影響過程の検討

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 静香, 織田, 安沙美, 廣澤, 愛子, 大西, 将史, 笹原, 未来 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/00028643

福井大学教育実践研究　2020，第45号，pp.61－67

実践論文

学校支援活動事業におけるケースカンファレンスの在り方に関する質的分析
― ケースカンファレンスの利点と課題の分析に基づく話し手と聞き手の相互影響過程の検討 ―

福井大学大学院連合教職開発研究科　鈴　木　静　香
福井大学大学院連合教職開発研究科　織　田　安沙美
福井大学学術研究院教育・人文社会科部門　廣　澤　愛　子
福井大学学術研究院教育・人文社会系部門　大　西　将　史
福井大学学術研究院教育・人文社会系部門　笹　原　未　来

本研究では，学生が学校支援活動を行う際に自身の活動を省察する場となるケースカンファレンスの在り方について検討を行った。学生へのインタビュー調査，およびKJ法による分析を行った結果，ケースカンファレンスの利点や課題として，話し手（発表者）と聞き手で共通する回答が多くみられ，相互に影響する傾向があることが確認された。また付箋やふり返りシートを利用したケースカンファレンスを試行した際の評価を分析した結果，それらの手法は全体の前で発表することに躊躇する学生が参加しやすくなり，事例検討への参加度を上げるという利点がある一方，付箋を書くことで時間が多く取られ自由に口頭で発言する時間が限られるという課題も明らかになった。これらの結果から，学校支援活動を行っている学生に対する効果的な支援に関する今後の示唆が得られた。

キーワード：学校支援活動，ケースカンファレンス，ふり返りシート，インタビュー調査

Ⅰ．問題と目的

近年，不登校・いじめ・発達障害・虐待など学校現場で対応を迫られる問題は多くなっており，スクールカウンセラーなどの専門家以外にも大学生などの学校支援ボランティア等のニーズが高まっている。学校支援学生が果たす役割としては，「クラス全体の学習支援をする補助教員のような役割」や「特別支援教育の対象となる子どもへの対応」等が多く[1]，それらの現場のニーズに応える上で学校支援学生の質の向上と多様性が求められる。

しかし，学校現場での経験が乏しい大学生が最初から単独で充分な役割を果たす事は難しく，自身の活動を省察する場であるケースカンファレンスや事後指導の重要性が指摘されている[2]。教育実践をふり返るケースカンファレンスの概念は，もともと臨床医学や臨床相談の手法を応用したものであり[3]，現在では保育や福祉の分野でも取り入れられている[4][5]。このように臨床現場や学校実践において，活動者が自身の行動・行為を省察し課題の解決に取り組むという営みは不可欠であり，ケースカンファレンス関連の研究も幅広く進められている[6][7]。

筆者らは，これまで学生が自身の学校支援活動を省察する場として質の高いケースカンファレンスの在り方を検討する中で，「ふり返りシート」を用いた実践を行い，学生が教育実践活動を進める上で注目する観点を活動の段階にそって分析し，その結果を授業カリキュラム内容を検討する際の参考としてきた[8]。

しかしながら，ケースカンファレンスの在り方について，より詳しい学生の声・評価を授業内で捉えきれず，ケースカンファレンスの構成者である「発表者（＝話し手）」と「聞き手」，それぞれがケースカンファレンスの利点や課題についてどのような印象を持ち，具体的な対応策を検討する上で必要なことは何かを判断する材料が不足している状況が続いている。

そこで本稿では，ケースカンファレンスに関するインタビューやアンケート調査を行い，その感想や意見を分析・考察し，学校支援学生に対する効果的な支援に関する今後の示唆を得ることを目的とする。

Ⅱ．方法

【研究１】

（1）調査協力者

X 年度に実際に学校支援学生（ライフパートナー：以下 LP）※として児童・生徒の支援活動に関わり，授業の一環であるケースカンファレンス（年間 5 回程度）に参加し，LP 活動に関する最終報告書の評価が高く優秀者に選ばれた学生の中で協力が得られた者を対象とした。尚，調査協力者 6 名の学生は全員学部学生であり，前述した 6 名のインタビューの際に得られた回答を分析対象とした（男性 0 名，女性 6 名）。※「学校教育相談研究」という必修の授業を通年受講する中で，LP 活動（1 回 2 時間× 12 回）が実施されている。

（2）調査内容

半構造化面接によるインタビュー調査として，実際に活動が行われた次の年度初期に1回実施した。半構造化面接によるインタビュー項目は表1の通りである。

表1.　インタビュー項目

①	発表者としてケースカンファレンスをどのように利用していたか？
②	聞き手としてケースカンファレンスをどのように利用していたか？
③	発表者としてケースカンファレンスの良かった点は何か？
④	聞き手としてケースカンファレンスの良かった点は何か？
⑤	発表者として課題と感じる点は何か？
⑥	聞き手として課題と感じる点は何か？
⑦	発表者として発表にあたっての準備について，何を考えながら，どのようにまとめたか？
⑧	発表したことによって，どんなことに気づいたか？
⑨	聞き手として，発表者のケースを自分のケースと絡めて考えたか？
⑩	聞き手として（見立てなど子ども理解に）役立ったことは何か？

（3）調査手続き及び調査時期

X年度にLP活動を行いLP活動に関する最終報告書の評価が高く優秀者に選ばれた学生に対して活動終了後（翌年度），インタビュー調査への協力を依頼し同意を得た。インタビューの実施は，第1～3著者3名で学生2名ずつ聞き取りを行った。インタビューの時間はそれぞれ30～50分であった。

（4）倫理的配慮

本研究について著者らの所属する大学の倫理委員会の承認を受けた（福井大学教育学部倫理審査委員会 受付番号：第53号　2020年9月18日付）。調査内容は，LP事業担当者である第1～5著者との協議を経て決定した。調査の目的について調査協力者に調査協力説明文書にて説明を行うとともに，調査への協力は任意であり，調査協力をしないことによって不利益を被ることがないこと，回答の途中で回答したくなくなった場合には回答を中断することができ，得られた情報は分析段階で個人情報と回答内容を分けて扱い，全体的なデータとして統計的分析を加えるため個人が特定されることがない旨説明を行った。これらのことを理解し，調査協力への同意が得られた者からのみ回答をお願いした。研究承諾書への署名を持って同意（インタビューの録音・調査結果の公表含む）が得られている。以下研究2においても同様の倫理的配慮を行っている。

【研究２】

（1）調査協力者

X年度にLP事業を通して実際に児童・生徒の支援活動に関わり，授業の一環であるケースカンファレンス（年間5回）に参加していた学部学生6名とLP活動経験者で授業のティーチングアシスタント（以下TA）として同ケースカンファレンスに参加していた大学院生3名を合わせた計9名を対象とした。

（2）調査内容

「付箋やふり返りシートを利用したケースカンファレンス」に関して，以下5つの質問項目（5件法）で回答を求める調査を実施した。項目は表2の通りである。

表2.　＜ケースカンファレンスに関する5つの質問項目＞

①	ふり返りシートを利用することにより，発表者を含めた全ての参加者が情報を共有しやすくなった。
②	最初に付箋で感想や意見を記入することで，全体の前で発言することを躊躇している学生でも参加しやすくなった。
③	ふり返りシートが記録として発表者に返却されたことは，その後LP活動を続ける上で役立った。
④	ふり返りシートを用いたケースカンファレンスの経験は，その他の授業や実習などに参加する上で役立った。
⑤	少人数グループであっても，ふり返りシートを継続してケースカンファレンスで利用していくことは，LP活動の充実につながる。

尚，ふり返りシートを利用したケースカンファレンスの流れは表3に示した。

（3）調査手続き及び調査時期

研究1と同時期のX年度にLP活動を行いケースカンファレンスに参加した学生（詳細は前述の調査協力者を参照）に対し，活動終了後（翌年度），メールおよび電話により連絡を取り，調査への協力を依頼し同意を得た。調査の実施は，第1筆者が5名，第2～3著者がそれぞれ学生2名ずつ調査を行った。回答時間は数分であった。

Ⅲ．結果と考察

【研究Ⅰ】

（1）分析方法

6名の学生から得られたインタビュー内容を一文毎（つながっている内容については一文とした）に区切り，半構造化面接によって尋ねた質問項目に適合する一文や関連すると思われる一文を抜き出していき，内容が同じであると考えられるものを一つにまとめ，それらを分析対象データとした。分析データはKJ法[9]を用いて分類し，学生にとってケースカンファレンスが発表者や聞き手にとって，それぞれどのような役割・機能を持ち，また課題は何であるかという観点からカテゴリーを生成しまとめた。なお，KJ法を用いた分析においては，筆頭

表3. ふり返りシート使用したケースカンファレンスの流れ（大枠）

	項　　目	時間	活動の内容	ポイント
事前	・グループ分け ・発表資料の作成（発表者）		・グループ毎で発表者を決め発表者は資料作成を行う。	・グループ分けや発表者の選定への配慮。 ・発表資料作りの工夫。
カンファレンス	(1) 資料配布・進め方の説明	2分	・グループ毎，付箋やふり返りシートを配布し，ケースカンファレンスの進め方について説明を行う。	・検討したい内容を最初に確認しておく。 ・発表をどこで区切るか提示しておく。
	(2) 事例提供者による発表と聞き手からの質問 ～インテーク～	3分	・LP活動1回目の記録（インテーク＝出会い）をもとに対象児童生徒の臨床像，主訴，子どもとの係わりについて説明する。	・簡潔に説明する。 ・対象児がどのような子どもであるのか，聞き手がイメージしやすい発表を心掛ける。
	(3) 事例提供者による発表と聞き手からの質問 ～活動前半～	6分	・LP活動2～6回目の記録をもとに，対象児童生徒の様子を説明する。	・発表者は伝えたい部分を絞って発表する。 ・聞き手は事例提供者の活動を非難するような発言は控える。
	(4) 事例提供者による発表と聞き手からの質問 ～活動後半～	6分	・LP活動7～12回目の記録をもとに，対象児童生徒の様子を説明する。	・質疑応答は簡潔にする。 ・聞き手全員が受け身的にならずに参加できるよう付箋（各自3枚）に質問等を記入する。
	(5) ふり返りシートの作成	6分	・事例提供者の発表時に記入してきた付箋をふり返りシートに貼る。	・聞き手全員が隔たりなく発表できるよう，ファシリテーターは声掛けに工夫する。
	(6) 全体での検討	5分	・ふり返りシートに貼られた付箋の内容をカテゴリー毎にまとめ，全体で検討したことを簡潔に発表する。	・カテゴリーでまとめる際には，活動経験が長い3年生等を中心に作業を進めてもらう。
	(7) まとめ	2分	・事例提供者がケースカンファレンスで得られたこと等について感想を述べる。	・発表者が検討してもらいたかった事柄について解決策が見出せるよう，全体としてのまとめ方を工夫する。
事後	・カンファレンス終了後，検討した事柄を次からの活動に活かせるよう，事例発表者にふり返りシートのコピーを返却する。 ・事例の中で気になる点（枠を超えた活動，いじめや虐待等）が見られた場合は，授業担当者や派遣校のコーディネーター等と共通理解を図る。			

者の分類やカテゴリー生成に対して，第2筆者に客観的な評価を依頼した。

(2) インタビュー分類結果および考察

インタビュー調査の結果をKJ法で分類した結果を図1に示す。尚，つながりが見られたカテゴリー間は点線でつなげている。以下にカンファレンスの利点と課題について，発表者（話し手）と聞き手の両者の視点から考察を行った。※具体的な回答は「」，カテゴリー項目を『』とした。

＜カンファレンスの利点＞

（発表者）

ケースカンファレンスを行う上での利点（図1）について，まず「アドバイスがもらえる」「他者のやり方を取り入れられる」「気がつかないことに注目できる」といった『1. 活動に関する助言の獲得』に関する回答があった。ケースカンファレンスにおいて発表者は自身の活動を他者に話すことで，アドバイスが得られ，他者からの視点により自身では気が付かない点について知る機会を得られることが分かった。また，「活動に対する不安があったが，カンファで他の学生から認めてもらえて，自信になった」「肯定的な意見を言ってもらうと自信につながる」「褒められると自信になる」といった『2. 活動への不安の解消』に関する回答があった。ケースカンファレンスで挙げられる意見をカテゴリー化した際[10]，“励まし”の言葉が一定の数で確認されているが，肯定的な意見や励まし，褒めるという聞き手の行為によって発表者は活動を継続していく上での自信につながり，次の活動に向かう上での活力を得られることが分かった。加えて，「子どもの変化が分かる」「自身の活動を振り返ることができる」「客観的にふり返ることができる」といった『3. 自身の活動についての省察』に関する回答があった。発表者は活動が終わる毎に活動記録を書き記しているが，それらをもとにケースカンファレンスで流れを追って活動をまとめ発表することで，活動全体の流れや子どもの変化を捉えることができ，自身の活動を客観的に振り返り再考する機会になることが分かった。

（聞き手）

聞き手にとってケースカンファレンスに参加する利点について，まず「自分にはないアプローチに気付け，参考になった」「自身の活動をしていく上で参考になった」といっ

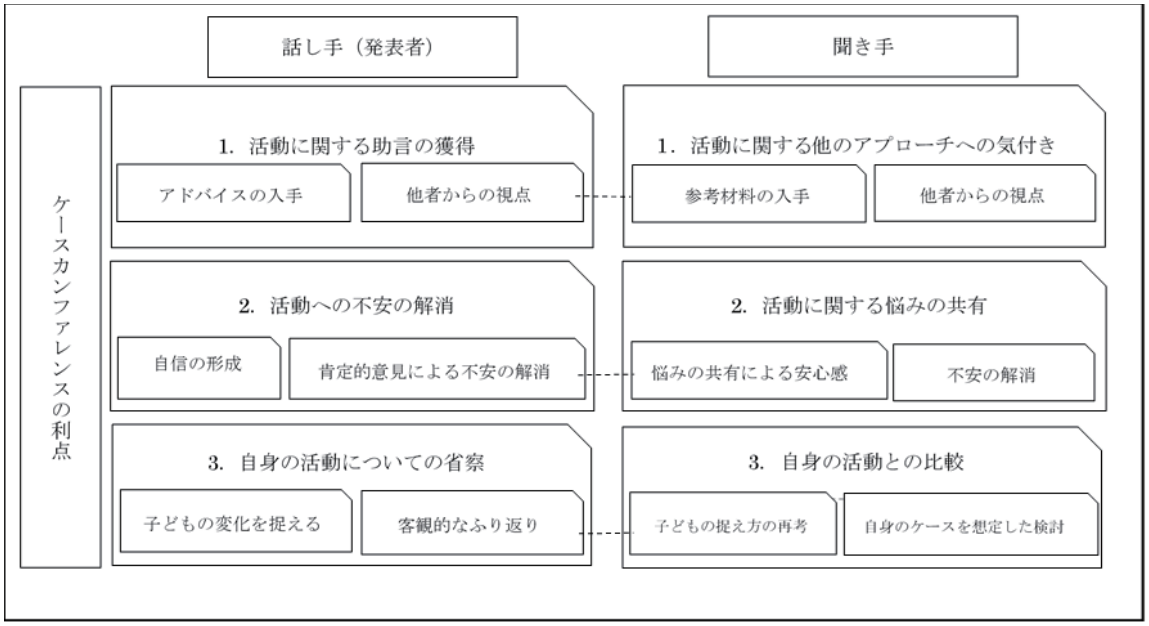

図1．ケースカンファレンスの利点

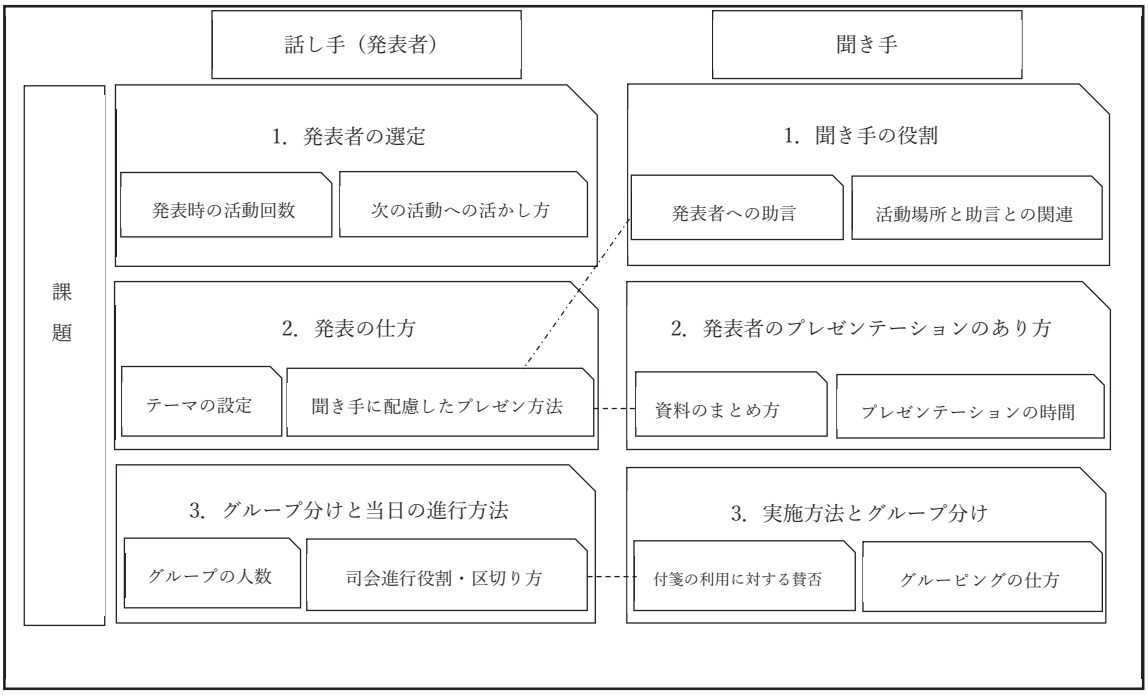

図2．ケースカンファレンスの課題

た『1．活動に関する他のアプローチへの気付き』に関する回答があった。ケースカンファレンスに参加することによって，対象児を理解する上での参考材料が得られ，他者からの視点で活動を見る機会が得られることが分かった。

また,「同じ悩みを持っていると参考になる,安心する」「（発表者も）似たようなことをしているんだなと思うことがあった」といった『2．活動に関する悩みの共有』に関する回答が挙げられていた。自身が活動で抱えていた悩みを発表者によって共有され，自分独りではないという安心感が生まれ，不安の解消につながるという，広義でいうカタルシス効果（心の浄化作用）[11] が聞き手側にももたらされる可能性が示唆された。

加えて,「自分だったらどうするか考えた」「対象児のアセスメント（背景など）の重要性を改めて感じた」といった『3．自身の活動との比較』に関する回答があった。発表者の話を聞きながら，自身のケースを想定した検討を行い，子どもの捉え方を再考する作業を行うきっかけをケースカンファレンスに参加することで得られる事が分かった。

＜カンファレンスの課題＞

（発表者）

ケースカンファレンスの課題（図 2）として,まず「全て活動が終了している学生が発表しても，発表者としては今後の参考になり得ないので，活動の途中で発表する方が良い」「発表者が（ケースカンファレンスで検討し

たことを今後の活動に）活かせる立場でないとき，感想しか言えない」「活動５回くらいで発表できると良いのでは？」といった『1. 発表者の選定』に関する回答があった。発表者の立場でケースカンファレンスに参加したものの，すでに全ての活動が完了しており，次に活かすことができなかったという回答があり，ケースカンファレンスを最大限に活かすためには，活動途中の学生の発表が望ましい事が改めて分かった。

また，「発表の仕方（プレゼンテーション）が分からない」「どこを削って，どこを残せば良いのか，まとめる難しさがあった」「聞き手に配慮していなかった」といった『2. 発表の仕方』について多くの回答があった。発表の仕方については，「テーマがあって話す方が良い」「活動が進むにつれ報告することが多くなると，聞き手の人が疲れている様子が見られたので，少しずつ区切ったり，交流しながらの方が良い」といった意見も出されており，毎回の活動報告書を読むだけではなく，議題を絞って双方向の話し合いになるよう工夫するなど，聞き手への配慮が大切であるという事が分かった。

加えて，「一つのグループの人数が少なくても良いのでは？」「グループの学生で司会や記録を担当しても良いのでは？」といった『3. グループ分けと当日の進行方法』について回答があった。ケースカンファレンスを行う上で，グループ編成は大切な要素であり，人数が多過ぎると意見が出しにくくなり，参加者一人一人の発言時間も減ってしまうなどの問題も出てくる為，人数調整と司会や記録など担当の明確化を図る必要がある。

（聞き手）

聞き手から見たケースカンファレンスの課題については，まず，「本当に役に立つ助言は何か，分からなかった」「発表者の活動が違う活動場所だと自分のケース結びつけられなかった」「どうやったら発表者の話が膨らむのか，元気づけられるのかを考えるのが大事」といった『1. 聞き手の役割』に関する回答が多くみられた。現場での活動場所が，相談室や保健室等（比較的小さい空間で個別もしくは少人数対応である活動）の場合と，教室（広い空間で大人数対応である活動）の場合では，その対応も大きく異なる為，聞き手が発表者と同じ活動場所でない場合はコメントしづらいという傾向が分かった。

また，「もう少し簡潔にまとめてもらいたいと思った」「報告書をそのまま読むのではなくて，言いたいところを資料としてまとめるのが良い」といった『2. 発表者のプレゼンテーションの在り方』に関する回答があった。聞き手として発表を聞く場合も，ある程度整理されたプレゼンテーションでないと受動的で退屈な時間になりうる可能性がある。その為，区切って発表するなど発表者の工夫に加え，聞き手にも何か役割を与え手持無沙汰にならないような配慮が必要である。

加えて，「付箋だと言いにくいことも書ける」「付箋はあって良かった。書くと参加する為」「付箋を使うと手元に残って良いが，普通に質問しても良いのでは？書く時間が省ける」といった付箋を利用することへの賛否や，「質問時間を長くして全員が質問できるようにした方が良い」「同じ教科のグループだと聞きやすいが，違うコースと混じって行う方がまじめに色々な意見を聞ける」といった『3. 実施方法とグループ分け』に関する回答が挙がっていた。付箋の利用はケースカンファレンスへの聞き手の積極的な係りを促すという意味においては効果的であるが，時間が足りなくなる要因にもなりうることが分かった。グループ分けについても，所属コースが同じクラスメイトで構成される回と活動場所で振り分ける回等いくつかのバリエーションを用意する必要性が明らかになった。

ふり返りシートや付箋を利用した試みによって，ケースカンファレンスの効果的な利用方法を検討してきたが，メリットとデメリットが挙げられており，その活用に関しても今後検討する必要があるだろう。またグルーピングの仕方や当日の進行については，発表者と類似する回答が見られていることから，進行方法等に関しては今後もニーズに応じた工夫が求められる。

【研究２】

（1）分析結果

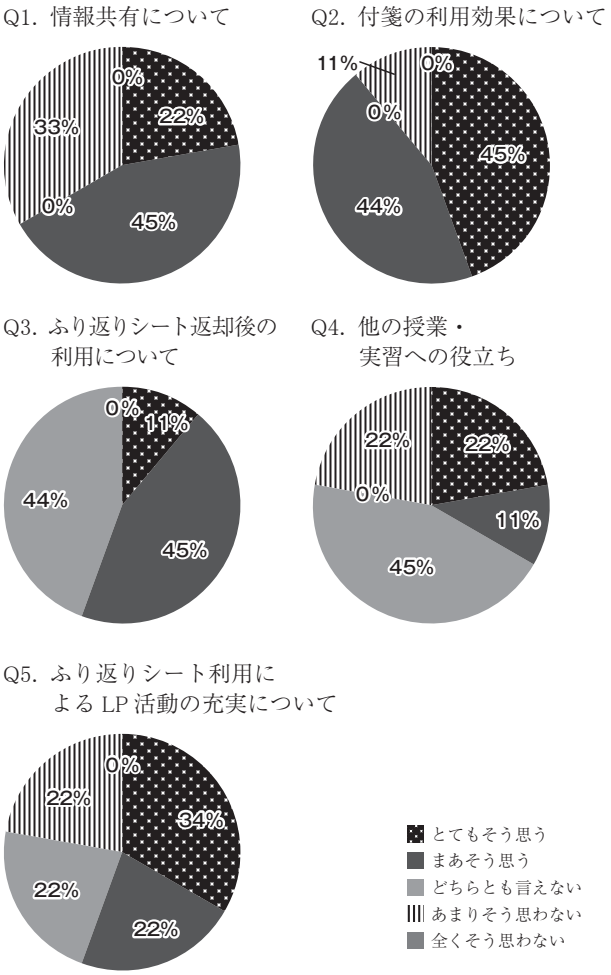

図3. 付箋やふり返りシートを利用したケースカンファレンスに関する調査回答

X 年度のケースカンファレンスに参加していた学部生 6 名と大学院生 3 名を対象に、「付箋やふり返りシートを利用したケースカンファレンス」に関する 5 項目の質問への回答をまとめたところ、図 3 の結果となった。

(2) 考察

ふり返りシートや付箋を利用したケースカンファレンスに関する質問への回答を分析した結果,「Q1. 情報共有」については，肯定的な感想が 6 割を超えており，概ねその効果は評価されている。

「Q2. 付箋の利用効果」については，9 割近くが肯定的に捉えており，付箋を利用することで，ケースカンファレンスの際，全体で発言することを躊躇している学生でも参加しやすくなるという認識が大半であることが分かった。

「Q3. ふり返りシート返却後の利用」については，5 割が肯定的な回答をしているものの，どちらとも言えないという回答も多く 4 割を超えており，発表者に返却を行っても，その後の活動に活かされるとは限らないという事が明らかになった。この結果は，研究 1 の発表者から得られた回答にあったように,「全て活動が終了している学生が発表している場合，発表者としては今後の参考になり得ない」という課題と関連している可能性が考えられる。

「Q4. 他の授業・実習への役立ち」については、役立つと回答したのは 3 割程度に留まり，実習等ではふり返りシートや付箋等のツール（手段）を利用するよりも，むしろ口頭での対話など双方向かつ即座に反応できる柔軟なコミュニケーション能力が求められる可能性が示唆された。

最後に「Q5. ふり返りシート利用による LP 活動の充実」については，6 割弱の学生が肯定的な回答を行っており，ふり返りシートを利用したケースカンファレンスの取り組みに対して一定の評価が得られたものと考えられる。

Ⅳ. 総合考察・今後の課題

ふり返りシートを利用したケースカンファレンスの試みに対するインタビュー調査やアンケート調査を行った結果，発表者・聞き手の両者から，共通したケースカンファレンスの利点や課題についての回答が得られ，相互に影響する傾向があることが確認された。活動を行う中で自身のケースを発表し，他者からのアドバイスや励ましの言葉を得ることによって，発表者は自身の活動を振り返ることができ，ケースの流れをつかむだけでなく，自信の形成にもつながるという利点が語られていた。また聞き手にとっても，自身の活動に関する共通の悩みを話し手である発表者が語ることによって，不安が解消され，広義でいうカタルシス効果（心の浄化作用）が聞き手側にも得られる可能性が示唆された[12) 13)]。

本調査の限界としては，研究 1・2 ともに回答数が限られていた為，今後さらに回答者を増やした調査が求められる。また, 今後取り組むべき事柄としては, 今回ケースカンファレンスの課題として語られた「発表者の選定」「聞き手の役割」「発表の仕方」「グループ分けと当日の進行方法」という 4 つの項目を中心に検討を行っていく必要があるだろう。可能な限り活動過程にある学生を発表者として選ぶこと，発表者には具体的な発表の仕方，聞き手には聞き手の果たす役割・意味についてケースカンファレンスの前に適切に伝えていくことが求められている。グループ分けに関しては，限られたスタッフ数の中で行うため工夫が必要ではあるが，TA 等の力も借りながら，サポート体制を強化し，より手厚い支援のもとケースカンファレンスを実施できるようなシステムの構築を目指していきたい。

謝辞

本アンケート調査にご協力くださった大学生の方々に厚く御礼申し上げます。

（引用・参考文献）

1) 原田直樹・梶原由紀子・吉川未桜・樋口善之・江上千代美・四戸智昭・杉野浩幸・松浦賢長（2011）. 大学生ボランティアによる学校児童生徒への支援ニーズに関する研究　福岡県立大学看護学研究紀要，8（1），1-9.
2) 山本真人・菅野文彦・塩田真吾・長谷川哲也（2013）「学校支援ボランティア」の動向に関する実証的分析，静岡大学教育実践総合センター紀要 .
3) 稲垣忠彦（1986）授業を変えるために：ケースカンファレンスのすすめ　国土社 .
4) 平松美由紀（2011）幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討－保育実践の一場面のカンファレンスの省察から－，中国学園紀要，10,163-167.
5) 長沼葉月（2015)「ケースカンファレンスの方法」の体験型研修に関する一考察，人文学報 499，社会福祉学 (31),14-28.
6) 堺愛一郎・中坪史典（2017）保育カンファレンスで複線径路・等至性モデリング（TEM）を活用することの意義と課題－若手保育者へのアンケート調査から－　宮城学院女子大学発達科学研究 17.21-32.
7) 白浜雅司・小泉俊三（2000）実習症例をもとにした「臨床倫理ケースカンファレンス」医学教育. 31(6):443-451.
8) 鈴木静香・織田安沙美・大西将史・廣澤愛子・笹原未来・松木健一（2018）地域連携間連携による学校支援ボランティア事業におけるボランティア学生への支援体制の構築～「ふり返りシート」を用いたケースカンファレンスの実践とその質的分析を通し

て～福井大学教育実践研究 ,42,63-69.
9） 川喜田二郎（1970）続･発想法―KJ 法の展開と応用, 中公新書.
10）前掲書，63-69.
11）大渕憲一（1993）人を傷つける心 攻撃性の社会心理学 , サイエンス社.
12）三浦恵津子・勝山千勢・須貝麻由美・今崎裕子・津田万寿美・和田サヨ子・近藤潤子（2020）「実習後のナラティブを導入したカンファレンスによって助産学生から語られた内容」―ナラティブアプローチが与えた学生への影響，天使大学紀要 20(2) 15-31.
13）McAdams. D.（1993）The Stories we live by: Personal Myths and the Making of the Self.

Qualitative analysis of the ideal case conferences in school support activities.

Shizuka SUZUKI, Asami ODA, Aiko HIROSAWA, Masafumi OHNISHI, Miku SASAHARA

Abstract ：In this study, we examined the ideal case conference, which is an opportunity for university students to reflect on their activities when they support children with special needs. We conducted an interview survey with students and analyzed by the KJ method. As a result, regarding the advantages and issues of the case conference, there were many common answers between the speaker (presenter) and the listener, and it was confirmed that they tended to influence each other. We also analyzed the evaluation of trials of case conferences using sticky notes and retrospective sheets. Consequently, these methods have the advantage of making it easier for students who hesitate to present in front of the whole to participate and increasing their participation in case studies. However, on the other hand, it became clear that writing sticky notes takes a lot of time and reduces the time to speak freely. These results provide future suggestions for effective supports for college students involved in support activities for children with special needs.

Keywords：school support activities, case conference, reflection sheet, interview survey